



宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

国際協力・国際交流のネットワーク作り	永 田 雅 輝
国際協力における自立的な発展 ～自身の経験から振り返り考えたこと～	吉 成 安 恵
国際協力の原点は故郷宮崎に在り	末 森 満
トルコ国 カレイ養殖プロジェクトに参加して	酒 井 正 博
	伊 丹 利 明
宮崎から世界へ・国際協力展2011 ～世界へ届け！みやざきのチカラ～	崎 田 佳 予 子

国際協力・国際交流のネットワーク作り

宮崎県JICA派遣専門家連絡会
会長 永 田 雅 輝

会員の皆様には、各方面でご活躍のこととお慶びを申し上げます。今年度は、当連絡会を取り巻く環境・活動が一段と飛躍できた歳であったと慶んでおります。

ここ数年、我々専門家連絡会と海外協力協会（協力隊OB会）と支援する会はJICA事業の協力団体として、宮崎に国際協力・国際交流の芽をどうしたら根付かせるかを模索してきました。この三団体がうまく機能すれば、必ずや歯車が回転し、宮崎での国際協力と国際交流を盛んにすることができるの気負いを持って、その具体化への話し合いを幾度か重ねて参りました。その結果、やっとその時期が今年度に熟したのです。それは、三団体の意気込みが強く一致したことに加えて、JICA推進員が三団体の粘着剤の役目になって活動してもらったことが大きいと言えます。そのために、今年度はJICA九州の支援を得て今までにない充実した国際協力展を合同で開催する活動の展開ができました。宮崎県民の皆様へは三団体の存在をアピールできるチャンスとなっ

たこと、またJICA事業への理解ならびに国際協力・国際交流への理解をいただくことができたのは大きな収穫でした。会長として今年度ほどネットワークがうまく行った年はなかったと強く感じた次第です。来年度もまた一緒に展示会をやるうとの約束が暗黙のうちに交わされておりますことは、三団体のネットワーク作りが旨く行った証拠と言えます。この内容は崎田推進員から本号へ執筆を頂きました。

また、宮崎大学との関わりも太いパイプができました。それは、同大学では予てより国際化には力を注いでこられましたが、今年度は同大学国際連携センターの専任教員にJICA本部職員が准教授として採用されたことから国際化に向けて万全の体制が敷かれたと言えます。さらには当センター初となる客員教授の任命がなされて強力な布陣が布かれました。そのお一人にはJICA本部職員が任命されましたことは、JICAと大学との関わりが、これまでより一層深化できることとなり、我々JICA事業を経験したのものにとっては大変慶ばしい事です。今後は大学

と三団体との幅広いネットワーク作りができることを願うものです。JICAからの吉成安恵准教授と末森満客員教授には、本号へのご寄稿をお願いしましたところ、快くお引き受け頂きましたことに感謝申

し上げます。

今後とも関係各位には、ご指導ご支援をよろしくお願い申し上げます。



国際協力における自立的な発展

～自身の経験から振り返り考えたこと～

宮崎大学国際連携センター
准教授 吉成安恵

皆さま、初めまして。昨年9月末より、宮崎大学国際連携センターで勤務させて頂いております吉成安恵です。前職はJICA職員です。これからJICA派遣専門家連絡会をはじめ宮崎県の関係皆さまにお世話になるとおもいますがどうぞ宜しくお願い申し上げます。

この機会をお借りして、新任のご挨拶と併せて、これまで関わってきました幾つかのJICAプロジェクトの経験を通じて考えたこと、また、最後に今後の抱負を少し申し上げさせて戴ければと思います。

私は、これまでJICA本部、JICA九州、JICAインドネシアで勤務を行って参りました。各部署での業務内容は様々ですが、これまで約20年以上国際協力の事業に携わってきたなかで、常に私自身のテーマとして持ち続けているのは“自立的な発展とは”です。この問題意識を有するようになったのは、ODA事業の個々のプロジェクト評価を行う際の5つの評価事項の一つに「自立発展性」という事項があり、この事項が常にプロジェクト終了時の評価を行う際に議論になるからです。また、日本の国民の方々からの国際協力に対する批判のなかに「本来、自国の発展、開発は自国民が担うべきであり、そもそも外国人である日本人が協力する必要があるのか。かえって主体者意識をそいでないのか。いつまでも援助していると自立できないのではないか」等の意見も少なくなく戴きます。また、別な観点で、最近では中国、インド等の新興国が他の開発途上国援助を積極的に行っていますが、その内容は豊富な資金

力を伴う投資やインフラ整備が中心と感じており（あくまでも私見ですが）疑問を抱くなかで、日本の協力の特徴は、相手国の人々の自主性、主体性を重んじた協力姿勢ではないかと感じていることにもよるものです。

従来より開発の世界で内発的な発展と外発的な発展との考え方がありますが、当然、国やコミュニティレベルにおいても経済、社会の開発にはその両方が必要と考えます。ただ、一つのプロジェクトベースに落として考える際には、経済成長に伴う海外投資等による外発的な発展はあくまでも外部環境の要素が強く、その外発的な発展に頼るのではなく、その国やコミュニティが有する在来資源等の価値化や活性化による内発的な発展を意識することが必要ではないかと考えております。自己流の考えではありませんが、この内発的な発展に重要と考えるものに次の点があると思っております。「人材育成」、「主体は誰か、第三者も重要」、「在来資源」、「科学技術の役割」、「経営的な視点」、「評価の仕方」です。

これらの観点のなかから、特に「人材育成」、「科学技術の役割」、「経営的な視点」のキーワードで考えさせられた2つのプロジェクトの事例をご紹介します。戴ければと思います。

まずは、私がJICA九州時代に関わったマラウイ国一村一品振興に関するプロジェクトの事前調査です。この案件の背景には、アフリカの中でも最貧国に位置付けられるマラウイ国において、過去に隆盛

であった海外資本（タバコや綿花の農場経営）の撤退等により疲弊した農村地域の経済活性化や、近隣国の抗争やAIDS等で早くに夫を亡くした女性世帯等の所得の向上が求められていました。（－詳細は紙面の関係で省略－）

この案件の協力内容の一部に農家でのきのこ生産を通じた所得向上活動がありました。きのこ（マッシュルーム）は他の農産品の価格よりかは高く売れることやマーケットとしても近隣の南アフリカ等の需要も期待できること、また、農業従事者の作業労度としては、子育てを行う女性でも行えることなどがあります。

また、アフリカで生息するきのこ類の中には、先進国で健康食品等として用いられる薬用きのこがある可能性もあり、調査研究も未知数の状況でした。但し、直ぐにビジネス化出来るものではなく、マラウイ国においては、まずは、マッシュルームの菌の育成、品種改良等、更には流通販売等の市場化を指導する専門家の育成が必要であり、それらを担えるのは唯一マラウイ国のマラウイ大学（ブンダ校）でした。日本側からのきのこに関する指導は、九州大学農学部をお願いすることになり、まずは、マラウイ大学の研究者を九州大学に受け入れて戴きました。本案件は、まだこれからの状況であり、その成果が予測できるのは今後数年後になるかと思いますが、マラウイの土地と農家事情に適した作物であり、かつ市場価値のある農産品の開発を行うことは、在来資源の価値化であり、そこに日本の科学技術を持って更に高品質化することやそれを担う現地の研究者の人材育成を行う意義は高いと思います。更に課題

となるのは、生産者の組織化、販路開拓等の市場化、安定的な生産計画に基づく安定的な価格維持等の経営的な視点とと思います。

次に、私が10年以上前にJICA社会開発協力部という部署に在籍した際に担当した「フィリピン大学交通研究総合開発プロジェクト」です。これくらいの時間軸でプロジェクトを振り返ると“ビフォー&アフター”が見えてきます。

この案件は、マニラ首都圏を中心としたフィリピンの交通渋滞等の問題を背景として、都市交通計画政策の計画立案や問題解決のための調査研究を行える機関の設立支援のプロジェクトです。このプロジェクトは、1992年～1997年まで技術協力プロジェクトとして実施され、1997年から2年間のフォローアップも行われました。当時、フィリピン大学内に設置されていた“道路交通訓練センター”がフィリピン側の協力対象機関で、日本側の支援機関は建設省（現 国土交通省）、文部科学省、東京工業大学でした。この案件の目的は母体である訓練センターのグレードアップと併せて、フィリピンに交通分野の学位を授与する機関がなかったため同分野での高等教育機関（修士課程）を創設することも目的としていました。このプロジェクトの困難性は、そもそも修士学位を出すための教育を行う教育者の人材育成から行わなければならない、当然、教員候補者は必要な博士課程の学位をプロジェクト期間中に取得する必要があるためにその間は海外留学して不在となりますが、一方で現地での教育、研究等のプロジェクト活動も進めなければならない状況でした。更に様々な困難性はあったのですが、詳細を語るには本紙の字数制限では語りつくせません



マラウイのマーケット



マラウイ大学ブンダ校スタッフ

ので省略させて戴きますが、最終的に本プロジェクトは次の成果を達成することが出来ました。①当時の訓練センターの名称から、交通研究センターの名称にてフィリピン大学の正規組織として認可され、修士教育を実施できる体制が整備されたこと、②副次的な成果ではありますがプロジェクト期間中にフィリピン交通学会や東アジア交通学会が設立され、その拠点が同研究センター内に置かれることになりました。これら成果を達成した要因は、当時の支援機関であった東京工業大学を中心とする日本の関係大学におけるフィリピン研究者の人材育成が大きかったと思います。日本で博士号の学位を取得し同センターに戻ってきたことがその結果を表していますが、その間の留学中に日本における課題解決の方法論や行動様式を学んだこと、また、日本人との交流による親日的な思いなどはプロジェクトの評価には明示されませんが、消滅することのない大きな協力の成果の一つだと思います。また、本プロジェクトにおいて、センター運営上の資金の確保も課題となりました。大学の予算以外の自己収入源の確保手段として、同センターによる政府関係機関への技術訓練サービスの提供や交通分野の調査等を行うコンサルタントの受託業務の活動も

プロジェクトの活動に含まれました。十分な収益を上げるにはまだ工夫の余地はあると思いますが、このような経営的な視点をプロジェクトの計画当初にも議論しておくことは重要な観点と思います。

この2つの事例は両方とも大学という高等教育機関が大きな役割を果たした案件です。今、私自身が宮崎大学に籍を置かせていただき、これから仕事をさせて戴くに当たって、より念頭に置いておきたい点は、「人材育成」と「科学技術の役割」です。また、言葉の持つ意味においては、国際協力ではなくて国際交流の方がこれからの開発途上国と日本の関係においても必要になってくるのではないかと思います。お互いが共存、共栄するために双方の持っている経験、知恵や技術知識を双方向に交換し、一緒にそれぞれの国、地域が抱える共通の課題を解決していく意味合いです。また、宮崎大学の知は、宮崎の地域に根差して蓄積されたものでもあると思いますので、私自身としては、この宮崎の文化や産業等々も一から学び、いつか、それらも海外との交流に繋げていく機会に関わらせて戴ければ有り難いと思っております。皆さま方には今後とも様々な場面でご指導戴きたく宜しくお願い申し上げます。



フィリピン大学ディリマン校



交通研究センタースタッフ



国際協力の原点は故郷宮崎に在り

JICAシニア課題アドバイザー

宮崎大学国際連携センター客員教授 末 森 満

国際協力の仕事に就いて35年以上経過し、振り返ると、それを取り巻く環境は時代とともに大きく変化し悩みや苦勞もあったが、総じて情熱を持って取り組みやりがいを感じる日々であった。途上国を訪れる度に幼少の頃の故郷を想い出すことが多く、国際協力に対する、特に途上国援助に対する思い、こだわりの原点は故郷宮崎にある。

幼少の頃の故郷は、経済的には可なり貧困であったが、豊かな自然と人間性に囲まれていた。

1960年代に日本は高度成長期を迎え、かなりのスピードで都市化や工業化が進むに連れて、多くの若者が地方から都会に向かった。私は18歳で故郷を後にし、大学卒業と同時（1976年）にJICAに入り、国内から海外へと活動の域幅を拡げて、多くの途上国の開発協力に従事し、様々な人々と接し、「内にいるだけでは見えないものが、外に行くと見えてくる」様な貴重な経験を積み重ねてきた。

今の世界においては、人、物、金、情報が大量かつ瞬時に移動するグローバル化が急速に進展してきている。それは、一部の途上国の経済成長と貧困削減に寄与し国際社会に繁栄をもたらす一方、取り残された国や地域もあり、特に地方や脆弱な人々に大きな負の影響を与えている。このグローバル化の「光と陰」を如何に管理運営するかが国際協力の大きな課題となっている。

日本国内を見ると、少子高齢化、若者の内向な社会現象、経済力の低下、財政赤字など問題・課題は山積で多様化、複合化してきている。貿易自由化の流れは止まらないし、国内市場は縮小傾向にあり、高度成長の続くアジアの市場は魅力的で、中小企業も海外へ出ていかざるを得ない状況にある日本である。今がチャンスと海外へ進出するのも賢い選択かもしれない。

更に、昨年は東北大震災をはじめ自然の猛威が日

本列島を直撃し、宮崎においても鳥インフルエンザや口蹄疫の発生に続いて、新燃岳が噴火して農畜産業に甚大な被害をもたらした。この災いから抜け出し如何に復興に取り組むかが宮崎の大きな課題となっている。

5年10年先を見通した時に更にグローバル化は進み、国際競争は益々激化していく中で、これに対応するグローバル人材、地元を元気にする担い手の育成は急務となってくる。外国人労働者や移民の受け入れを議論している間に、アジアでは人材を奪い合う時代に突入している。途上国や新興国での生活体験、業務経験は異文化を理解し宗教や価値の違う人達との協働や共存を容易くする。これらの条件に合う、帰国専門家や海外ボランティアOBは地域の重要なリソースのひとつであり、今後そのネットワークを強化・活用して、地域の開発への貢献が期待されている。

大学は地方の智の創造の拠点、大学が地域と連携して地域社会の発展に寄与貢献する事が地域社会から望まれている。地域の各ステークホルダーが抱える技術や各種システムなどを集積、体系化し、それらを財産としてビジネスに活かして行くことが重要で、それを可能足らしめるのは地元の大学である。地域の底力を発揮するには、地方・地域の得意な、優位性のある分野の知見を結集し、関係者の共存共栄（win-win ゲーム）をどう設定するか、産官学連携をどう促進するかなど、知恵と工夫を早急に積み上げていく必要がある。

還暦を迎えた今、「魚の鮭」の様に故郷宮崎に回帰し、生まれ育ててもらった故郷に少しでも恩返し、役立ちたいと考え藻掻いていた矢先に、昨年夏に宮崎大学国際連携センター客員教授を拜命する栄誉を得た。地域の人が自分たちはどうしたいのか、地域の人と金をいかに活性化するかなど、それらを考え

る手助けをして、次の世代にバトンを渡す一躍を担えれば本望である。

「やっと故郷宮崎に帰ってくるか」と多くの知人友

人が喜んでくれる、この期待にどう応えていくか自問している。

トルコ国 カレイ養殖プロジェクトに参加して

宮崎大学農学部 教授 酒井 正 博
同 教授 伊丹 利 明

トルコ国は地中海、黒海、エーゲ海およびマルマラ海に面して、水産業が盛んですが、近年過剰漁獲によって漁獲量が減少しています。そこで、これを補うために魚類養殖業が活発化しました。しかし、養殖生産量の95%以上がシーバス（スズキ）、ヘダイおよびニジマスの3種によって占められています。そこで、養殖対象魚種を増やすために、新たに黒海ガレイ（*Psetta maxima*、現地名Kalkan）の養殖技術開発をJICAの技術協力を得て、1997年から10年間実施しました。2007年からは、本魚種の養殖を地中海側でも展開するために、拠点を黒海沿岸のトラブゾンからアンタルヤに移しました。本事業の目的は、普及・事業化に適した養殖モデルの開発であり、引き続きJICAの協力で実施されました。我々は、その仕上げの事業項目としての「魚病管理」の短期専門家として派遣されました。

派遣は、平成22年2月（酒井）、同年6月（酒井）、同年10月（伊丹）、平成23年6月（酒井）および同年10月（伊丹）の合計5回で、派遣先はアンタルヤ

でした。現地では、本事業の立ち上げからずっと技術協力をされている根崎専門家と協力して仕事をしました。仕事の内容は、基礎的な魚病診断から分子生物学的診断法（主にPCR）までを網羅するとともに、バイオセキュリティの考え方の習得と実施までを幅広くカバーしました。1回の派遣は1～1.5か月で、その間、トルコ国農業村落省やJICAトルコ事務所との打ち合わせおよびサンプリングのための出張などが入ると、所定の用務を完了させるためには、土日にも仕事が入る始末です。しかし、現地のカウンターパート（C/P）は嫌な顔もせず、一緒に仕事をしてくれたのはありがたいことでした。最後の派遣では、C/Pが講師となり研究所や現場の職員に魚病診断やバイオセキュリティの考え方を講義しました。これは思いのほか効果があり、職員から質問やコメントが多く出て、活発な議論となったことは忘れられません。その後、現場の職員も自主的にバイオセキュリティに取り組み、養殖施設の感染予防の整備が進んでいるのを知り、大変うれしく思っています。



黒海ガレイ 体表にイボがあるのが特徴



黒海ガレイの養殖システム

平成23年度の2回の派遣は東北大震災の後だったことから、驚くほどたくさんのトルコの方（知らない人も）からお見舞いの言葉をかけられました。また、同年10月の派遣では、今度はトルコ東部のVanで大地震があり、救援に行っていた日本人のNPO職員の方が亡くなりました。この時も、またまた私のメールボックスにもお見舞いのメールをたくさんいただきました。トルコが親日的であることはこのほか有名ですが、それを肌で感じた次第です。

トルコ料理は世界三大料理として知られています。

やはり野菜、肉、フルーツ何をとっても大変おいしかったです。ヨーグルトやチーズなどの乳製品も豊富ですし、オリーブなども種類がたくさんあり、本当に楽しませていただきました。上記のような土日もないハードなスケジュールにも関わらず、肥えて帰ってきたことはトルコ料理が性に合った何よりの証拠です。

本プロジェクトは平成23年12月末をもって無事終了しました。次回トルコに学会等で行くことがあれば、もう少しゆっくりとしたトルコの時間の流れを肌で感じたいものです。



黒海産カタクチイワシの炭火焼を食す。これはおいしい。



「宮崎から世界へ・国際協力展2011 ～世界へ届け！みやざきのチカラ～」

JICA宮崎デスク・国際協力推進員
崎 田 佳 予 子

2011年10月29日、30日にイオンモール宮崎にて、「宮崎から世界へ・国際協力展2011 ～世界へ届け！みやざきのチカラ～」が開催されました。

開催のきっかけとしましては、宮崎県JICA派遣専門家連絡会の永田雅輝会長のお声掛けがあり実現したイベントです。

今回、宮崎県JICA派遣専門家連絡会、宮崎県青年海外協力隊を支援する会、宮崎県海外協力協会、JICA九州が共催し、初の大規模なイベント開催と

なりました。

イベントの内容としましては、パネル展示、写真展示、JICA体験型模型展示、JICAボランティア派遣中の隊員からのメッセージ展示、震災へ向けてJICAへ届いた世界からの応援メッセージ展示、世界で活躍する宮崎NGO/NPO4団体ICNMの活動紹介ブース、JICAなんとかしなきゃプロジェクトブース、民族衣装試着ブースなど、盛りだくさんの内容となりました。

2日間で2186名の来場者があり、たくさんの方に
見て体験して頂き、世界の現状を知っていただく良
い機会となりました。世界各地で行った国際協力活
動の写真やパネルを見ることで、国際協力が身近に
あるものだと実感していただけたのではないかと思っ
ています。

アンケートの感想より、ボランティアや国際協力
について知れる良い機会になった、もっと興味がわ
いた、開発途上国と先進国との貧富の差が理解でき
た、日本にいることでは知ることのできない各国の
現状を少しでも知ることができた、宮崎から多数の

方が派遣されている現実に驚いた。など、多く温か
い声援や率直な感想を頂きました。

または非開催して欲しい!との声も多く、JICA
宮崎チームとしてももっともっと声をあげて世界の現
状、宮崎から世界へ飛び出し活動されている方々の
ことを伝えて行くべきではないかと実感したイベン
トとなりました。

イベントに関わって下さった関係者の皆さまに改
めて感謝申し上げます。

ありがとうございました。



展示会場 その1



展示会場 その2



展示会場 その3



スタッフ

編集後記

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報「JICAエキスパートみやざき14号」をお届けいたします。本会報
を通して会員相互の連絡を密にして、本会の発展につながりますように皆様方からのご提案やご意見
をお待ちしております。

ご連絡は、下記の世話人へ頂ければ幸甚です。

会長：永田雅輝、幹事：位田晴久、山本正悟、大野和郎、佐伯雄一、山口良二

事務局：〒889-2192 宮崎市学園木花台西1-1 宮崎大学農学部内